

知識の源泉としての「アウトドア環境教育」に関する研究

背景・目的

本研究では、デンマークの「アウトドア環境教育」の中心であるアレロッド森の幼稚園、農場保育所などを訪ね、「アウトドア環境教育」の効果が、日本の保育の5領域である「健康」、「人間関係」、「表現」、「言葉」、「環境」にどのように反映されるのか検証することを目的とした。

実施内容

1. 対象：デンマークのアレロッド森の幼稚園リーダー（スタミネ農場保育所の主任、グラムスベア保育所園長にも面談しているが、紙面の都合上割愛する）。
2. 方法：半構造化面接法により約1時間、インタビューを実施した。

結果及び考察



図1. アレロッド森の幼稚園

アウトドア環境教育の保育効果について、アレロッド森の幼稚園リーダーのトーマス・ロゴー氏にインタビューした（2016年3月3日）。

まず、就学後、森の幼稚園の子どもたちが、他の園の子どもたちと、どのような違いがあると評価を受けているかを尋ねた。

その結果、森の幼稚園の子どもたちは、「学ぶのが容易」との評価を受けることが多いとのことであった。ロゴー氏によれば、「学ぶのが容易」



図2. トーマス・ロゴー氏 自ら発見し考える力が育っている、(4)感性が豊かであり、創造的な表現を好む、などのことを意味する。

この回答から、森の幼稚園の保育が、「健康」、「人間関係」、「言葉」、「環境」、「表現」の5領域全てにおいて、高い保育効果をあげていることが分かる。

また、これらの領域の中で、どの領域を重視しているかを尋ねたところ、ちょうどプロジェクト型保育のテーマとして、「人間関係」を取り上げており、この領域を重視しているとの回答を得た。また、具体的な援助として、子どもたちが「心で感じ、身体で感じる」ことを心がけているとの回答を得た。子どもの健康な自我の育ちが、人間関係の基礎となることを指摘する言葉と解釈される。幼稚園教育要領や保育所保育指針の人間関係に関する記述において、自我の育ちに直接触れる箇所はない。しかし、他者との関係において、まずは自分という存在をしっかり置くことが重要であることは、心理学的にも理にかなった考え方であると言える。

日本では、いじめや不登校などが、大きな社会問題となって久しい。これらの問題がいつこうに解決しないのは、自我の育ちを重視する保育・教育実践が不十分であるためかも知れない。

とは、(1)集中力・体力があり、しっかり教師の話の聞くことができる、(2)協調性・コミュニケーション能力に優れ、クラスでの適応力が高い、(3)「学び」に対して能動的であり、